中村俊定文庫
文庫 18
504

石谷藤屋
那賀郡
銀
嘉戸浦

中村俊定文庫

三回忌

此君亭

梅花音ゝ寄紀玉柳鶯弘峯　文卿子

まをまをやうゝ春音紀　西　嵩

塞く炉小菓子の夜も長き雪て　仝

熱頭神の燈小放さ雪　卿

小雪ゝ月の影画ゝ簡を置　仝

雁紙小後ゝ麥語ー稲　喬

義ふ著這をて拵ふ呼の者　喬

くさ〜〜へ蒼子惜ひ芋饗　卿

孫ろ見こい新り雜面社省　仝

溢觴向〜ハ此意を兩　喬

さ〜〜こおふ新年云へぬ亡二社　仝

笑ろを笑ふお香良洲の貝　卿

雪ふ養素福社枝の下さ〜〜　仝

鉢やうふ有ふる鍔橋　喬

紙鞄ち代羯鼓や初むろん　仝

見ぬ世ハ留主ハ素る人　卿

芋を弱ぬ定家うつ〜も花筐　仝

接木ふ見世る斧の手社内　喬

二

朝戾星丁雉の口へさ〜さ寸　仝

百合ふ為さめろ〜る蜜走　卿

賽銭も出う〜社友の魚金形佛　仝

雑物気も おく巡る叡山　喬

疫病の神を祭めん大夕立　喬

王佐の才ならねども持酒　卿

柄杓炉も行足掛し比翼蓙　仝

三百あて二人助ぶ　喬

軟立ふ注を一て来る巣乃店　仝

初汐を知る律宗ぶ袖　卿

おもたるの雫ゆる身の松ちひ　仝

寒ず癒くこを蜻蛉の射　喬

那賀郡 石谷 嘉戸浦 銀

ウ

四四一字て麿貶分る役者藝　仝

半部さ一うす始かさ北　卿

紙屑ちがいと投きり棺笥解　仝

慨ふきわめを誰ユミん　喬

亟別と杖ぶ蠟海る道ぶ花　仝

立ふ太ぶく巣を守る鶏　卿

夜叉彩おろく追善
狂言の後一打

虫ゆゑ鉄竹や四畳半の茅かや色　故人　蓴江
身ぶし忘るゝ苔のおもひ石　竹九
みさゝを画くゝもみな舟ぶし　巴光
抜き引きのあとぬるる猫　達五
篭青し生ゝさゝ袋の初茄子　蓴喬
抄鉄たゝひも肩語る風炉　麦川

市中ふすまし切る屠伯居　白羽
芝去る雇ひ車蔵ス坂　稲弘
うゝくゝ離形を貸す恵衣　蓴琴
叶をぬうちゝ多記秀逸　巴光
立栄鉄みゝハ歪を狂ひ心　竹九
ウ　舟のうなぎし嵯嫁鉄青月　蓴喬
土ゝり火を怒るゝ出ゝ記歎炭　達五
人宮を る時鉄拵ハ生飯　白羽

是ものハ赤寺か寺ハ出屋敷　麦川

詩人の働なも　西陣　皆淡

たちぬきちやうさいちうふもの面目　稲松

摘ぬ小菅る友垣ハ狗把　執筆

追悼

いつ是も朝夕を暑ス

紫社雲も神の梨や降る屋　友山

山吹も閑迦汲む岩のあり哉　竹陵

雲ふ入多哉作くを向て南　麦川

むさぬの雲ふ入り百千多　白羽

雲ふさ〳〵昊もあるのふ涸う方　天耳

芋ゝ竹芋ゝ掘ハ雲社昊　車秀

茂茂や哉の基のいさ子とも　寒声

去風ふかわ多袖社を向哉　翠石

不世とも思はし六十五夜寒雲　尾玉
寒雲霧ふかゝらぬ夜は物淋　圃人

仝

念仏も手向の花はしをれて　僧 呑舟
明日見んと約せし花も手向哉　仝 諦觀
不思義なる花は墓ふかし安座　花邑
ちる花の墨りや西の迚ひ雲　自明
ふ雲も匂ひの花は名ばかり　秀車

おしまるゝ名殘の杉は身や花　桂嘉
身ふ智て却て花八花乃名殘哉　東論
嘆やさ世七宮樹林花宮中　麦三
十万里丈夫奥素虎杖　秀后
紫殿雲の褥や夜素　拙　蒲川
色〳〵殿手向も素花分限　路尋
侍花袖ふ殿るや花殿　西　里桂
墨隋し撥力も知ふの果　必之

忘れを誰か問ふや芙蓉の花　　箕蹄

芽出しうゝ達の臺に上座哉　　仝

老ぬとも弱ひし号か寄

白梅や一名殺る後光佛　　文笙

渡る世を松おし寒に成る雪　　蛙角琴

雨信しむ寒か信を成る閑迦　　乙彦

音楽の雲を蒙るや成の書　　卅丸

同行を道を跡おし谷の寒　　蛙角路

成ぬ風に便や法名舟　　仝

雲を信立るや花の迹ひ紅　　稲舟

谷の寒の間や雨しかく　　仝

引蛙に立隙法しむうひ雲　　蛙角淡

我為に吉雲に成の景　　仝

脊伸て美の移りや花君国　　松亭

今を知る影の姿を竹に輝　　呉江

文珠舎に智恵も届ぬ哉　　達五

朝ゆ向ひ夕戸ゆ尋て一日為に
みつゝ枝の書写し新墨こゝ墨
云へくもあゝ臣山上岩非を定めぬ
眼を失ひし思ひふ浅程又師の薙
うゝ却城と更みやうゆ身ゆ合く

誰ゝ為ゆ皆をハ彩ん花の浪　蕉高

山示低し永き日の影　巴光

張絹の板出寸脊戸ゆ蝶群て　仝

芝漸く生そた宮ゆ石　喬

赤ゆ孔乾きゆ夏の柔柱　仝

一始皇の風呂　三伏　喬

お寺と囲碁の神の賀を祈　光

字引の手数多く検閲　喬

芋〳〵差く時を活気を墨衣　仝

隠を拂ハ釣瓶も邦广　光

手拭の涙ちよつと郵社松　仝

泣森入る砂〳〵寺詣　喬

俊る丁寧世の出活る嘘〳〵や苔　仝

春見の亭の屋ハ志筑中　光

限りのある詰社細工鈴田姫　仝

外出ハくミ養生手疵　喬

傷を彫日本の猿社蔵云　仝

見遠き宿も家〳〵梅戸　光

然つよ志川三作善孫蓼小人も
おもくろふくおもおもる蓼葉を
すくふ吉お小倍へ付り哭

雲ゑ入江ふ夢のむつ吉子哉　蒲喬

追悼

一事の公主や幾日おし三月　巴光

一孤の悲歎蓍ふ灯を失ひぬく

ちる花や梢の残る限り　仝

追善一孤の霊法を吉慕

ゆゑ誓ふ吉むとのすゑふ弘　蒲喬

半紙し孤ふ吉る教の教く見ふ
つふふ吉も絢つふふ半ふり

我為孤生敷孤や　花日記　仝

初七日

野安しまふ吉称名ゑ耳孤在　竹九

捻香の薫里や世ふ名とり蓼　蒲路

接点孤言伝ゑ孤　郭　云　呉江

摘初て亦神ぬ寸夏むう形　巴光

笹の葉に露玉立て菱多数　　蒲喬
立先くる日の板ぶし風車　　達五

二七日

路を吊ふ笹や蓉忘かきれて　　巴光
おゝひ出て菖も玉巻袖うゝ南　　呉江
和の恋無尖明つくや十日月　　北九
のひる程身ゆ〜むる恋や麦つゝ　　達五
恋と知る蓮の根絶し多恋恋　　蒲喬

仏生会

赤蓮の仏ちあちへ生出り　　蒲喬

三七日

名も高し牡丹堂の九重壇　　北九
恋のお記後の名あるや古墓　　巴光
仏名を唱へ別きぬ子規の笑　　蒲喬

四七日

恋のうゝ浄土ぬ恋ちかとうゝ　　北九

ゆふとやや牡丹一八多向茅　吳江
指折しバしゐる夏しる苣の蜜　菊喬

五七日

ゆふ入るおゝ〳〵やゝ曇ぬるさとも　卅九
志ゝ子新序見めぬ序や雲見茅　達五
竹の子やおと訪く風もきのふ　菊喬

六七日　みつゝ茅を作り雲をゝ茅一を思ひて

夏菊や札ふも白ふ茅の跡　仝

皐月ふも恋ふる恵ミあ星ゆゝ笠　卅九
枯る思ひ川ふゝ立ゝ茅恵　吳江

七〻日　ちるくと茅ひしも　たゝや後の七りふ当り　ぬ恵ハ法の席ちひ　知ゝ後のいさ茅も　おゝひ出ゝく

折て亦見ゝやゆゝ立ゝ雲見茅　菊喬
橋やむゝ〳〵ふかゝ新硯茅　達五
西の日ゝ新ハ恵ゝ立ゝ竹　卅九

百ヶ日　進善

水上の潤や晴るて百日紅　此君亭主人

清白らしや百日紅の花ばかり　竹丸

讃重ぬ恵文与兵の夏寺哉　呉江

他境追悼之句到来之

依題述

一歩　仙人
武陵子ゆ

文一つ〳〵屋くやの奥の五月雨　子成子

菊江姫を人ゝ皆自由ふ拾ひて
ちり〳〵菊ゆ人のちりやすし　祇仙
いらぬ小ハ世ハ世ハ雪ふ比いさゝら哉
風ふ、世ゆ世ゆ世ゆ　てさらたふの花ふ
ゆ月ふ哀ふ悼むへし

洛下
春要子
五始

句ふ弼寸古人の言葉（ユヒト）本蓮花

宮坂氏菊江といへる風士ふ吊いまさるあいめ
ゆ記人ゆ山ゆ泉ゆとゆ月しふ追吾
孔句せよゆ行谷氏の手ゆふや嬉しく

懐像　蓮日菴
菊や世ゆ　武然

追善

連翹や莫迦るいつゝ孔子忌　京　十庸

惜しめ只吹ぬ風ふて菊ちる　浜尤　鶴芳

手金魚戻るゝいゝ川き　橋人　伊勢秋川　蓮皐

啼涙ゝ雲も茶毘や雲ゝ入　全田丸　涼至

芳名哀ふるしおるゝむふ日おくて
古人のよし友ともより追善の句を
需るゝふ意しして

見ぬ梅おうゝ茶の点を向の香　若州小浜　南人

ちゝ忘らし遺家の点仏を向ふ　今　画耕

ちる跡よんの花虫句ひう那　石巴川本　志程

言弦如ふ志う祢花咲せし陸奥の
紫江老人叶素嵯紫摩重也ふ
世を経ふ孫ふ世自有菊弦紅を手
ふ孫東西万里と宿ふ志ふ国乃
色ハ是ハ追悼の点句を需ふふ擬く　石巴大宮

甚高き名も高ふ入る弦跡　今　江橋

五色の墓弦肉よ花虫雲　今　積水

言記名高ちて雪よ山桜　今　山洞

炬燵をてをかもはなれ難き哉　可登

鳴くの小鳥聲小なり　也青　今　楚江

東坡の友小名波村むや蓼は友　思友　今大森

蓼は世の消炉哉春　孤隣　今

ちるもやるさへ色のおみなへし　楚山　今

かくまんし名もきへ安しあきら　林之　石列

集りし悼の句を一集小冊さんせ

ふるた志ちるし　泉生季ゆまろ翁

一句を追悼の句を

百潮したよりも梨の花哉　今

此日小おのく吾師十和翁の身

まうとうをまつ荊呉子を帰と

もるるほよりもおとつれのかくあんるを

かちむめ

袖小おく蕗の小芽哉　ちり梅　南部　楚卯

菊江のぬし泉下のあと訪ふ一句

蕗ぶくれうを名や奥さうり　稲人　石巣渓

一周忌

載くやめ意とて筆ぬぐう竹　蕭喬

隣さる事をおしまあふ友　達五

雲ホ入ゐて雀も口利て　叶九

揭枝をくぐる人ありて見蚤　稲舟

ちらり紀墨ぬる月の中　蕭浚

萩のかしらを帳おとホ　孤　巴光

唖か虫ゐ知人と呼ぶ竜の垂　蕭圭

紋日表沼尻ホ龍の爪　吳江

伝屋漢の中ホ富樓那ハ三字仏めき　五

俤の裸ゐて大事志ちり　喬

猪喜引き下ゐを通ゐ居ん　舟

庵丁紙沼ゐ読ゐ素言もの　浚

永出冠を勢てゐと敷ル柏　光

廉の子ゐ角も序もつゐの弓　九

うらくゐ三才畠景て目を蒲　喬

新に踏のも気晴しお付　圭
菁替を寄せ手代ふ古志庵　淡
来世は果報吐きまする　舟
二
強請手足家雛のちうら猫　江
伎者も交人も若労扣肩　五
补末のうつ語ゆ祢遅ら貸草履　丸
大手並ぶへ走らうの意　淡
あくさゝ浩細て髭挙る髪時識　喬

三川さりやふ財布石直　光
おとうハ強氣にも似ぬ歎炭　圭
面向不背の畫そ卍　江
未やちも古も貫ぬき指先ゟ合羽　舟
てゝ赤栗の毬も鞠かと　淡
過ぎ出ぬ世の寄手自ら字　喬
癢も落ん笑を張弓　丸
ウ
撚るもの見つく濁にも緑の垢　江

居合抜隆大字ヲ脇　圭

遠ク義ヨリ久米の岩橋すてんそう　喬

みちもる子まるく折る言の詰　五

文臺ヨ白木ヲ苟の贈集め　光

何ヲ不隆やみて　蓁　桃寿

一周忌

名社花ヲ散りても残る白ひるゝ　香舟

残る遠を踏めば不足る記念哉　松亭

影言し七尺去って塚の法　文笙

折て無さんと社上を分け哉　箕跡

来ぬ旅を知ってる待や木蓮花　稲舟

過る日ヲ咲も義政や法勝寺　叶花

隆ヲのみまり老師の墳ヲ詣

蓁生成て往新廣記桐の事　蟬圭

一周忌

ヲ汲むも影茶の話を初むし　今

手向や巳りをおり花の筒　天耳

北辰の浮灯ふ弦ん墓社燭　喘洗

一発多至刹那ふ素めふ生ふ　麦川

日哉留る筆ふ孫茅志ちん哉　呉江

ちるく又哉の自ひや一周り　達五

師父翁一周忌
慈父百ケ日

遅き日の一ちたや記忌日ふ　巴光

辛くも哉の法法孔もー誘ふ集るる
面ふ法ふの新ふ叶ひて手記さ記

と符合せるとも一めムる孔摩
ふ倫多

我忘る魂ら月出度哉の跡　喬

跡うるたおもよ月日のすやうも
るふしを

ちや英月爰とうム、ふ寺二つ　仝

一周忌

京
春要会

春候伺を多向賀　業孔種　五始

一周忌追福哥仙

ちちききれ
土を封しかりよ　墓のみきう収骨孔あき
境を築ふ比日

あらうり墓哉築くと幸の一日ふ
歌を沢と六とかきを供

今更手土を　啄む　蒙　可南

菓芳しく埋も見ぬ　芝　　安秋府　　嵩喬

尺杖ふ苔ぬ　守　賢さまて

乾坐手泊る金貨ふ追

秋を又月並を見ん夏社月

樹と乙川と埠の昭換

青竹を流れく葉きの味

暖と聲氣を時を版彫

四十年かきりふ守るかよふ神

菓子社友ハいう新人氣

竹柿と松京越て二日碎

古跡捜しの嘘ふ曹杉

釈尊　足ふ落さる焼　青

月手亂の荒る　新小屋

花輩ふ名自させて見るとを菓

偏しぬ間おを巻といふん
世を世と指ふ壹別利休形
白社獲月ふう有て拓蕃
二日宮中ふ牛の吼合ふ西の京
天地打ち巻ま群集おき宮
器法師ふ似さる貝足の系引寺
技持て育ハ霧も撲柄
ふ欲ふ強飯嗜の九十社賀

雷ヲ孫起もなるん猿村
栄西を末巻りの幣ま系ふ紀
唐社法白ふ白ふ泡盗
南蛮入合社刹若拒世ふ色
勿就なくもおぬるを尾
風社室ふ法ふ方至自静
達ま巻つしやく夢ハ大素
ウ
古法取玄輝きあふハ主津

價付の袖無舌を憂
恵をきうちを寄蓬が半生繁
揉の生絹ハ揉こ紙 桂
蓼や為捨て給仕ハ玉たう
蓼かくれ迄り徳くれる山

端午

玉人小五月の玉も瓦う南　嵩喬

故人

追福歌仙

十知亭

おもかりや春も笠めを田植時　天耳
菓を出る為紙彼見せぬ蓬　嵩喬
抹梁の紙こ星くらり小胃折て　耳
向ふ小も窓向ふふも　窓
石組の山ち杉分　眠りの袖　仝
おまを音みを哭雲　鋸　喬
ウ
乳紙多き為を紙意の小紙を屋　仝

極仙屋ゟ昆布　桶伏　耳
宗一ハ素ゝ糸を手抱身　仝
寄て参ゟ親〳〵言訳　喬
初登り西とも岡崎ひの山　仝
扨て汲井の側ゟ碑の銘　耳
六根ハ清浄常ゟ拙わを禮　仝
酒價高く市〳〵らく書　喬
見飽き〻附ゟ見るハ磯出さ里　仝

手ゟ吹て泊さ紅谷　耳
産と立仗童九ゟ出た雲　仝
几巾を張てをる見分　喬
二京ゆ〳〵出京集る一月寺　仝
筒持ゟゟ粧む助た刀　耳
子丈社松ゟ出おゟて露社声　仝
心の熟社さめ海上加茂　喬
出ハいゟ京素さ厩まぬ洗供米　仝

宮音小割る格言の笛　耳
玉堂春色彼を來ハ定て入　仝
名所多紀を住國の曉　喬
惟光を打ふしきみら情を語　仝
北黄も彼を古来稀ゝ　耳
張し紋身足迹ひ小地し初　喬
紙濂おうれ造りおむ酒　耳
子ウ後去の者へ分る牡丹の根　仝

奏曲亂て後る亂義用　喬
万貫も唐鈴通寶一箭ひ　耳
おふ星魯孔初もの子高　喬
此道の松写を花の會式ふて　仝
鞠加衣裳掛さる姿ら殺ら　花茅

明和庚寅の春十知亭社翁没し
給へるを今年社事業を失ひ門葉
悲歎限りなきを追福為
枝章儿上不湍く是を摸写し
衆子孫弼弟の世角喬の低若却
たうたうたる(の)の初春泉下の
志を癒す其徽誘を伸て拝不讃
先生誠吊し以歩の墨を歴え

ゐ故郷の梅の花の咲かぬ国も詞友を
偲ぶ亦遠雁の春白を多く載おむ
しを見し仏縁ゆゑ一ゑ法好士ぶ
四月廿八日　呉江謝

癸巳初春

各地に菜ぶ暑

寄せ強く読ゑ多く社　達五
人日の望に佛の日と為る　竹九
毎漏へ出る仏を睦　月八日哉　巴光
降雪ちらちら寒しまの雪　蕭主
梅蕾多く社読誦もあちこちし　順之
強寄讀む多るも紅梅可哉　東角
冬星る神の社の下うち　梨石

摘袖弘寿ふゆるや佛の座　素英
招ふ迄る筆まもみを春の水　素芦
手向とるゆめぬるゝも涓ちゆ　雨角
地塚を掛る海や素堂の霞　天耳
宮賢夢ちまゝ話しの花春　車秀
いて迄る主を主主あれ法の水　松亭
世ちちまてる弘ふ蓋ゆ　桃雨

他境追福句準別案以遠速

奥の沸湯ある窮窟祖士ふ一とせ知ちの
ま一ハ月せ一まいうちりんちとの嘆月
永まうゆ月ふらし味ゝ仏やるかゝ
ちちをせ先て生ちをんめるゝちを
以ゝ伝善仏書まもと味ゝちを記ちとの
味ちを一先とゝ同調の人ゝおもすめ
味の塚乃ゝ句とハちしぬ

伊別
信

砂ゝ雪弘ふ消てわうゆ　一如
穀の日弘市の花うや孫雀蘭　如羅
左筆の甲斐ちを中や笠の笠　白馬

ひのきぶやハ日ホちまし仏の座　契樹

聖とも梅ホもやりし夢うゝ　卧木

ゆゝしき水て淀ず南　有字

ゆゝ敬くさしめ来の初日哉　少年　完車

涼志を雨水と蛙ん一七日　廿　歩舟

ほうもて見しやまとの雪　友菊

人の日やゆゝたうゝ迄ひ雲　桃五

志ゝ川の音たゝ里して雪消哉　桃思

独吟一万発句を了て誹諧

為るき蜻蛉高桃人　此おのり師

少年と迄悼ゝ遠作る

消ゆる名の雪ゝ滋の水ゝ南　石見大田　江橋

蜻蛉の主張永ゝ師ふゝ止悼して

海陸子余を八ちくて法社永　仝　楚江

陸奥の蜻蛉高むけき八月黄泉の

高ゝ岐ゝ志ゝ山ふゝ一ゝ安ゝ系の志ゝ

志ゝ山ゝ聖ゝく敬吐てゝ

手向とも志ゝて咲ん宿雲梅　仝　可登

さん寺おうたを自者菊の亭子
かさらつうちみちのく弘おの秀方
紫香高さとし　ちんきの宣者おなれ小
沈をも見たいそうぬいまさの叫俊子
まの世ろく一句おさ是寸

左京
石及大田
林く

とけまくも雪ふかくまるさおゆ哉

名たうゆえを人を志ふうろ子
たやくも世を詩をきて　紫菊子の
雪子を向付る

石及小淡
稲人

思ひやるおるも苔知るの寒さひ

彼岸は書子　高丈をうやミし
紫おの雅人　寂まうのかと安所の
こゝ香小をは　玉の和を上ちの堂
玉を失ひしおもひ一句おさ中まる

石及波積
在句舎
友人

波るる名小さそ積き春秋伸記

ちなくやんの友丸　百子子

筑陳敬
茨墻

何とおく年の冬とみて神主し

鄙拉舎
花橋

何慶有南北と高生八弘お和哥山
と高のるハおさとまし五始詞宗ろ
紫香のめ　弘さゝせルれハ

南紀
江青鑒
椿林

ろ社弘添ろ子向ん梅丸屯

香ふ[illegible]て[illegible]向よ梅の花　南紀　其流
[illegible]日のゝめくる[illegible]葉の間面白　仝　[illegible]楓
宮引や佛の[illegible]ゝ　[illegible]　石刕西田一斤弁　杜行
佛を後ひ出[illegible]や[illegible]め弘法　勢刕イセ場　白里
[illegible]の奥向八て敷り[illegible]　仝　不濁
裏白ヲ表[illegible]　仝　板川上村　榮皐
[illegible]乃葉[illegible]ふんを[illegible]　仝　侍　柳始
陰[illegible]や涅槃も待[illegible]地ヲ踏　仝　五成

[illegible]元〳〵包井戸　仝　五扇
[illegible]　仝　田[illegible]連　仲始
香[illegible]ヲ敷[illegible]梅の花　仝　田九　亦辟
一捻り梅の[illegible]屋け風弘侍　仝　涼至
切れ巾や[illegible]し[illegible]の孔雀　仝　支木
[illegible]ヲ[illegible]方ヲ[illegible]し風弘梅　仝　榎田川　東皐
梅ヲ時[illegible]ゝ[illegible]法の[illegible]向哉　仝　河田　山湖
彼ヲ[illegible]ヲ[illegible]や[illegible]陀利蓮　仝　射和　百杖

聖寺ぬ　たうの紅葉の　神後　仝　蕭風
遠方を　を迷も　記憶を　蒙業　仝搭田川　西山
猪る雪や　古ホ面へ　出を　志ゆき　仝　胡山
乙も香も　経ぬ　あの世　桜の　仝　文風
世ホ桜も　業ぬ　風ホ　吹　仝　凡鳥
高き　花や　蕾を　業る　仝　素楽
多部堂や　強よを　多も　行便　仝　里桃
寒蕾を　仏ホ　ハちん　蕾　仝四番　宗牙石

世を去る　詠　院乃ホ　ホや　も　発の　法　仝河田　勇始
去をうし　十万　信士　起る　も　ー　め　仝馬ノ上　岳起
ホ紅人の　ホも　弱　ま　ら　語　義　仝稲木　蝶亀
繋　を　を　是　を　多　向ホ　ホ　夫　候　ま　大坂　筠男
七夕や　ま　記　無　面へ　佛の　座　京　十庸
ホ　桜や　新　を　ホ　ま　ち　名　ホ　を　や　仝　住桐

鞘香高　報道人　世　我　早　せ　を
ー　を　新　を　紀　悼　を

何ぞ仏ゐの位を寄の雪　洛自有翁　五始

追善

解て其大心海へゆき佛　小才　吳江

時を初めおぶし寄せ方より
帰ひの妖を踏乃文限雑ていと
繕つふて斗

夢社宿訪ふ人や持仏堂　仝

一七日

ふる人のむの〻殘る白ひら布　仝

二七日

手向くもふる老る寄の水　仝

三七日

立ち寄机淋しき佛の座　仝

四七日

一物もおもき事柳つのゝさし　仝

五七日

名ゑ留て消る五行や寄の夢　仝

六七日 彼岸ふかうして

たゝハるゝ彼岸をなほ 碧 第 仝

七〻日

皐月初旬 墓の香清し 士華 仝

聖吳會吊先哲

五七五の句 嘉 拙の七五三 仝

十三夜懷旧

先達し新を上青の名殘哉 仝

一周忌

中くるゝ茶おろう抱をおもわれ 僧 法瑶

咲すハ人の哀しうまし

菊香高のぬしゝ一免くるゝ

香を捨るて

春要補改

遠國の梅ゝ香深し行便 甫羅菴

まゝ子ゝ一夜のうつゝ一周 達五

地蔵菩薩報謝ハ蔦し一を抱 松亭

子咲き殆讀み尽す三衣うち　　廿九

帛ふ話や年も二葉の若竹芽　　乙彦

筆塚や及縋香を梅の花　　吳江

墳前墓ふ詣で

おもてとて咲うまし梅を梅乃花　　仝

おみきまゐふ袖の香ぞ

一周忌哥仙

六條を遠ふ通し法花梅　　五始

かぜふ自日を強ふよむ音　　吳江

山うつゝ春の中ふ紅さく　　仝

宮一ツ寺ッ花あれと引提　　始

天井ふ画へきものを婦嫁ふ是　　仝

妻の加減も身拵よ記法　　江

ウ

投入ル芦の穂を折を小弁　江

活信ゝ和ハ和さるい　始

天和尤も高き老のなる京ちらく　仝

藝氣の強き人の伽羅　江

穆王ハ四足減して日枝肩　仝

毅王羅しく堂ハ建立　始

極ふむんさゝく三保ヶ浦　仝

上まの殿さ茅屋慇懃　仝

無陀を宮ゝ脉ハ時を敷　江

廿ちめう祢もめくるかけろふ　仝

かゝ風呂ハ髮も振芝花弘月　始

せんまい蕨又蓬おしゝ　仝

二

光次ゝ双も立ゝ迄ぬ貞女ゝ　江

一生涯ヤボ言ていまを加るゝん　仝

六尺ゝ三尺の袖汐合ゆ　始

抱て寝るとも茄子種さへ　仝

酩酊を程偽多し酒の味　江

五常てを仁五徳てハ胃　仝

をく屠所男ふさのを欲もなし　始

何を唱へて冠、塗る人　仝

月の中田地を持てかをれ里　江

さかるく家ちを施る多聚楽　仝

又皮羅を含の八塩いやら上、　始

生さやうちる曲鞠乃鞍　仝

扨ウ　扨ハ図両濃き手水鉢　江

きまぬちうを手素良ち各産　仝

風の胃扨甲裴ハ千かふら　仝

うをを葉ふを為用不為用　始

佐保姫の正覚成て花の雲　江

書記を醋を来ちう記録　粃米

津軽弘前藩喬八郎氏ニ贈ル人ヲ

題吟一万句の發句を

北野清文庫へ納ム人ヲ志ヲ記シテ自筆

第稿ヲ以テ登ニ載シ清書シテ甲乙

評ヲ押シ定ム高評ヲ加フル程亦

清く淨く夢殿を書ス壮麗を

知ル吊八名代トシテ宿坊能暦を記ス

ヲ弱めまる也余國ヲも勧ムを云捨

又ふ人の不忘ル清ヲ一てを表弘

めるとし伸え伝る藩子ら万句ハまゝ

並ひ知記仕歌なり表遣勧ムの内を

拾ひ寄ヲ記を

春夏秋冬樹五始評

山桜若記を樹の後り初　藩喬

年ヲ重ル摂ム品ヲ多男　、

右百廿点

石谷銀
那賀郡
嘉戸浦
藤屋

石すゑものを焼くを添える、

右百五十点

敷一つゝ富士を消す丹枕、

右百七十点

此角高高八高判集を梓行さんと立れ
風雲示唆るうちたゝの品あとおもうさの
書人筆異江上京は退善を速
安永四年未六月　有隣庵